

6節。「これらのことを話したのは、わたしの喜びがあなたがたの内にあり、あなたがたの喜びが満たされるためである。」

「喜び」と訳されている言葉 (*χαρά*、カラ) は、ヨハネによる福音書ではこの節で2回出てくる他、3:29(2回)、16:20, 21, 22, 24、17:13 など全部で9回出てくる。

「あなたがたは悲しむがその悲しみは喜びに代わる。」 (16:20)

「子供が生まれると、一人の人間が世に生まれ出た喜びのために、もはやその苦痛を思い出さない。」 (16:21)

この「喜び」はすべての悲しみや心配、恐れが消え去ったことを意味する。

「わたしの喜び」、すなわち主イエスの喜びは、「父の愛に止まってあることである。そしてイエスの言葉がうちにあること (7節)、イエスの愛に止まること (9. 10節)、それらは喜びが満ち溢れてくることである。それはイエスの喜びがうちにあって満ちあふれるのである。父によって愛される喜びである (9節) ここでも父とイエスの関係がイエスと弟子たちの間に実現する。愛の結果として喜びが満ち溢れる。愛は喜びを溢れさせ、喜びは愛と切り離し得ない。喜びはその本質を愛から、愛されることから受け取る。イエスの喜びはまた弟子たちを愛する喜びであるとも言える。愛される喜びと愛する喜びは一つである。弟子たちの喜びは、イエスに愛されることのみならずイエスを愛することでもある。ヨハネ福音書では、イエスについても弟子についても愛されるということが愛することの出発点となっている。」 (伊吹)

12節。「わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい。これがわたしの掟である。」

10節に語られている主イエスの「掟」が何であるかがこの12節で説明されている。それは弟子同士の相互の愛である。その愛は、主イエスが弟子たちを愛したように愛することである。

「ここでイエスに愛される者同士の関係が主題になる。これはぶどうの木についての話の展開とも言えるが、もともとその話は実を多く結ぶことへと向いていたのである。すなわち、それは互いに愛するということを包含していたのである。イエスに愛される者同士にも、同じように愛、それもイエスが愛したその愛が妥当し実現するのである。そのことによってヨハネ福音書の教会論が完成する。この教会論にはイエスの愛以外の原理はないのである。縦からの関係が横の関係を構築する。『あなたたちを愛したように』という『……ように (*καθώς*、カドース)』は単なるあり方の比較でなく、その根拠づけと力の源泉を意味する。互いの愛はイエスによって枯れることなく、一瞬一瞬に現実に力づけられていくのである。」 (伊吹)

伊吹氏がいう「ヨハネ福音書の教会論」とは、教会は愛によって成り立ち存在するということ。「縦からの関係」とは、主イエスが弟子たちを愛すること、「横の関係」は、主イエスが愛したように互いに愛すること。

13 節. 「友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない。」

【TEV】 The greatest love you can have for your friends is to give your life for them.

「これは一般的にいうと諺的にとられるおそれがあるが、一回的にイエスの十字架の愛をさしている。」(伊吹)

13 章 37、38 節には、ペトロが主イエスに向けて「あなたのためなら命を捨てます」と言い、それを受けて「わたしのためなら命を捨てるというのか。はっきり言っておく。鶏がなくまでに、あなたは三度わたしのことを知らないと言うだろう」という言葉が記されている。ペトロは、主イエスのために命を捨てることができなかった。それほどまでに主イエスを愛することもなかったということ。復活の主イエスが彼に現れるまでには。

主イエスは弟子たちを「友」と呼んでいる。ここでの「友 (φίλος、ピロス) は、直前の 12 節で言われている、主イエスに「愛される者」つまりキリスト者のこと。命を捨てる愛 (ἀγάπη、アガペー) で互いに愛することが言われている。

「命を捨てる」。主イエスは「わたしは良い羊飼いである。良い羊飼いは羊のために命を捨てる」とも言われた(10:11)。主イエスの愛の根源は「父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛してきた」(15:9)とあるように、父なる神の愛にある。

「この言葉によってイエスは十字架の愛を説明し、イエスを信じる者同士に何が最高の愛であるかを示したのである。それと同時に愛は喜びであり(11 節)、それが父の愛へと帰り、…」(伊吹)

14 節. 「わたしの命じることを行うならば、あなたがたはわたしの友である。」

【NKJV】 "You are My friends if you do whatever I command you.

【TEV】 And you are my friends if you do what I command you.

「命じること」と訳されている言葉 (ἐντέλλομαι、エンテルロマイ) は、単数形が用いられている。「互いに愛し合う」こと。

「行うならば」(if) とあるが、直前の 13 節において主イエスは「友のために命を捨てる」と宣言している。すなわち弟子のことを「友」と呼んでおられる。だから、主イエスが命じることを「行うならば」は、条件というよりは、主イエスの犠牲により「友とされた」者として、主イエスの命じることを行うことが言われていると言える。「友であることはイエスの命じることを行うことにおいて遂行される。」(伊吹)

15 節. 「もはや、わたしはあなたがたを僕とは呼ばない。僕は主人が何をしているか知らないからである。わたしはあなたがたを友と呼ぶ。父から聞いたことをすべてあなたがたに知らせたからである。」

【TEV】 I do not call you servants any longer, because servants do not know what their master is doing. Instead, I call you friends, because I have told you everything I heard from my Father.

「僕」と訳されているのは、「奴隸」と訳されることが多い言葉 (δοῦλος、ドュロス)。8章34節で「罪の奴隸」と訳されているのが同じ言葉。

「わたしはあなたがたを友と呼ぶ」。原文では完了形で書かれている (【NKJV】 I have called you friends)。

「イエスは主であると同時に友であるという……。そして友と呼んだ理由が挙げられている。しもべは主人が何をするかを知らないが、イエスは父から聞いたことをすべて知らせたからである。『すべて』とはまずもって9節に集結して言われたことである。父のイエスへの愛をもって愛する愛は、13節に明確にされ、友とは最大の愛をもって愛される者なのである。このように愛される者は最早しもべではないのであり、イエスが何をするか、そして何において友とされるかを知っているのである。それを知らされたものは、愛を告げられた者であって「愛される者」すなわち「友」なのである。……。そして友はしもべと違って、主人が友としてその者のために命を捨てたことを知っている。それは同時に弟子たちに『わたしの愛にとどまれ』(9節)ということが命じられることである。それが友であるということに答えることなのである。」(伊吹)

16節。「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ。あなたがたが出かけ行って実を結び、その実が残るようにと、また、わたしの名によって父に願うものは何でも与えられるようにと、わたしがあなたがたを任命したのである。」

【TEV】 You did not choose me; I chose you and appointed you to go and bear much fruit, the kind of fruit that endures. And so the Father will give you whatever you ask of him in my name.

15節で「友と呼んだ」のは、主イエスからの一方的な言葉であり、世間的なお互いの同等の関係ではない。

「『わたしはあなたたちの友である』と言われていないのは、弟子たちがイエスとは独立してイエスを友としたのではないからである。このことはそもそも『信じる』、『弟子となる』ということにも妥当する。弟子たちの側でもイエスを友として選んだのではない。友という関係はイエスの選びによって成立した。そのことに伴って課題と約束が与えられるのである。」(伊吹)

主イエスが弟子たちを選んだのは、二つのことの為である。

一つは「出かけ行って実を結び、その実が残るように」である。

「『実』とはイエスの愛の結実であり、17節に言われる相互の愛である。止まる(新共同訳では「残る」、原語は、「μένω、メノー、とどまる、つながる」とはそれが止むことがないことを示すが、『永遠の命まで』ということも含意されよう。『行って実を結び』の『行って』は、……。宣教に関わるとも主張される。……。これはぶどうの木において示された愛が、閉鎖的なものでなく、すべての人に妥当するという非常に重要な、また決定的

な言葉である。すべての人が招かれている。勿論宣教を示すとも言えようが、性格にはここで示された愛を伝え実現させることである。ヨハネ福音書の愛が閉鎖的ではなく、その反対にすべての人が招かれているということを明確に強調している。」（伊吹）

二つ目は、主イエスの名によって父なる神に求めさせるためであり、また、成就して下さるためである。このことについては既に7節にも似たことが語られている。7節との違いは、「わたしの名によって父に願うもの」となっている点と、（新共同訳では分かりづらいが）「父が与える」（the Father will give you）となっている点である。

「これは18節以下の世の迫害に対して言われたと考えてもよい。絶望や不安は確約が果たされないということの前取りしてしまうことであり、それに対してこの言葉が与えられている。」（伊吹）

17節. 「互いに愛し合いなさい。これがわたしの命令である。」

【TEV】 This, then, is what I command you: love one another.

「1-17節のぶどうの木についての話を閉じる言葉である。それは互いに愛せよという命令である。そして最後の命令である。愛は命令をうちに含むのである。」（伊吹）